

熊本市における地域共通語話者の発話に 現れるコードスイッチング —家族-友人間に着目して—

吉里 さち子

1. はじめに

戦後、マス・メディアによって、共通語化が急速に進んだといわれているが、地方では共通語を身につけつつも、方言をなくてはならないものとして、絶やすことなく使い続けてきた社会背景がある。熊本市も、同様に人々の日常に方言が息づいている地域である。

田中（2012）は、熊本を含む九州地方は「積極的使い分け派」に属しているとしている（注1）。「積極的使い分け派」については、以下のような特徴が挙げられている。

生育地の方言が好きと言える確率が最も高いクラスで、家族や同郷の友人には生育地の方言を使うことがあるが、異郷の友人には使わない。ふだん共通語を使っているという意識も高く、それは方言と共通語の使い分け意識の高さにも表れている。共通語に対する好意度も最も高い部類のクラスである。（p.127）

田中（2012）の指摘は、九州地方出身者である筆者には大いに共感するところであるが、現在の地方都市における言語使用はそれほど単純なものではない。つまり、「方言一辺倒」と、東京方言を「標準語」に据えた「完全共通語化」の二項対立ではなく、「生育地の方言」、「共通語」の他に、「共通語」にほどよく、その地方都市の「方言」が混ざった「地域共通語」というものが存在し、三者鼎立をなすと考える。熊本市のように、「共通語 - 方言折衷社会」となっている地方都市では、経済活動において他の地域との接触や交流のため「共通語」が必須であることを受容しながらも、同じ地方都市の中における円滑で効率的な「心地よい」コミュニケーションを目指すため、一

部に「方言」を織り交ぜた「地域共通語」が自然発生的に用いられるようになった。「地域共通語」に含まれる「方言」は、沖（1999）などで指摘されている「気がつきにくい方言」等を指すこともある（注2）。このように、田中（2012）が指摘する「共通語」との強い使い分け意識が働きつつも、「方言」のコミュニケーション上の効率を優先し、「共通語」に「方言」が混ざった「地域共通語」を用いているのが、熊本を含む地域社会の現状であり、地方都市で使用されている言語が「地域共通語」と言われる所以である。

では、「地域共通語」はどの程度東京方言を中心とした「標準語」と異なっているのだろうか。「地域共通語」の存在を認めるのであれば、その実態を明らかにする必要がある。

本稿では、20代の女性の自然談話を録音採集し、友人との会話と家族との会話で現れる方言要素に着目し、その使用実態を明らかにする。また、標準語中心の友人との会話の中で、方言へのコードスイッチングについて調査し、その生起条件について考察することを目的とする。

2. コードスイッチング

コードスイッチング（code-switching）とは、二言語話者が文章や談話の中でその二言語を交互に操りながら話す話し方をいう。研究者によっては、コードミキシング（code-mixing）と呼ぶこともある。例えば、かつて放映されていたホンダ・フリードのコマーシャルに出てくる「This is サイコーニチョードイーホンダ」というフレーズなどがこれにあたる。英語から日本語へコードスイッチングしている例である。

本稿では、標準語と熊本方言を二言語と捉え、標準語を使用する熊本方言話者を二言語話者としている。そのため、筆者は、熊本市における地域共通語には、標準語と熊本方言によるコードスイッチングが出現すると考えている。

では、なぜコードスイッチングをする必要があるのだろうか。これについては、まず、東（2009：27-28）では、コードスイッチングの分類について、以下の4つが示されている（注3）。

- (A) 場面、状況、話題が変化するにつれておこるコードスイッチング
- (B) メンバーシップを確立するために使われるコードスイッチング
- (C) 聞き手と話し手の間で生まれるお互いの権利や義務について交渉

するための手段としてのコードスイッチング

(D) 2つの言語のうちどちらの言語を選ぶべきかわからない場合に、どちらの言語にすべきか見極めるために使われるコードスイッチング

(東 (2009 : 27-28))

(A) ~ (D) のいずれの場合においても、二言話者や方言話者であれば、無意識のうちに意図して用いることは容易に予想できる。

また、Holmes(1992:43)では、コードスイッチングを使用する理由として、まず話者の社会的立場の変化が主たる目的であるとして、次のように細分化している(注4)。

1) 参加者への注目・意識

- a. 自身のアイデンティティーの確認
- b. 終了の表明
- c. 心理的距離の提示
- d. 社会的立場の強調

2) 話題

- a. 他者の発言の引用
- b. ことわざ等の引用

3) 相互作用の役割や目的

- a. 発話を強調する
- b. 発話に権威を加える
- c. 感情を表現する

(Holmes (1992 : 43, 筆者改変・訳))

東(2009:27-28)とは表現に違いがあるが、いずれの場合においても、コミュニケーション・ストラテジーとして、話者が積極的に用いることを前提とした分類となっている。

地域共通語におけるコードスイッチングでも、同様の理由で方言にコードスイッチングすることが大いに考えられるが、これから地域共通語を身につけようとする人にとっては、まだ情報が十分ではない。特に、東(2009 : 35)でも指摘されているが、「会話の当事者たちは自分がコードスイッチングしているという意識が全くない場合が多い」。つまり、前述のような会話に自然に参加することを目指すならば、その無意識のコードスイッチングも体得することを目指すなければならない。これは、熊本市における地域共通語使用でも存在している。この無意識のコードスイッチングを解明するため

にも、さらに詳細な生起条件を明らかにすることが求められる。

3. 調査対象資料について

本研究の調査対象資料は、熊本市在住の20代女性（以下、話者Aとする）の自然談話資料である。録音は2014年の冬に採集されたもので、家族や友人との自然談話が録音されている。

録音に参加したのは、録音に承諾し、採集を行った話者A及び、家族3名、友人や後輩が4名、職場、先輩が各2名ずつの合計12人である（このうち男性は2名、女性は10名）。表1は、話者Aについての情報を示したものである。話者Aは、生え抜きの熊本方言話者で、両親も熊本市あるいは熊本市近郊の出身者である。また、家庭ではよく方言を使用し、仕事（話者Aの場合は学生であるため、本人はアルバイト等だと捉えている）の際、あまり方言を使わないと認識している。

表1 話者Aについての情報

	年齢	性別	現在の住所	出身地	仕事	父親の出身地	母親の出身地	居住歴	家庭でよく方言を	仕事の際によく方言を
話者A	21	女	熊本県熊本市	熊本県熊本市	学生	熊本県熊本市	熊本県宇土市	熊本県熊本市(0-21)	使う	使わない

表2は、各談話データについての情報である。音声データファイルは全部で29あり、場面別に家族との会話14、友人13、先輩1、目上の人1となっている。家族や友人との会話はほぼ同数で、どちらも40%台を占めている。

表 2 談話データについての情報

談話 No.	場面	談話 15	家族
談話 1	友人	談話 16	家族
談話 2	友人	談話 17	友人
談話 3	友人	談話 18	友人
談話 4	目上の人	談話 19	友人
談話 5	家族	談話 20	友人
談話 6	家族	談話 21	友人
談話 7	家族	談話 22	友人
談話 8	家族	談話 23	友人
談話 9	友人	談話 24	家族
談話 10	友人	談話 25	家族
談話 11	家族	談話 26	家族
談話 12	家族	談話 27	家族
談話 13	先輩	談話 28	家族
談話 14	友人	談話 29	家族
		友人	13 44.8%
		目上の人	1 3.4%
		家族	14 48.3%
		先輩	1 3.4%
		合計	29

4. 分析方法について

録音で採集された音声ファイルは文字起こしを行ったうえで、テキストファイルに保存し、計量分析ソフトである KH-Coder で分析した。KH-Coder とは、立命館大学の樋口氏が開発した自由記述テキストの計量分析を可能にするソフトである (ver.3.Alpha.09h. <http://khc.sourceforge.net/>) (注 5)。新聞記事、アンケート、インタビューなどの計量的内容分析に広く用いられている。アンケートでは、高評価の顧客のコメントを分析し、何を評価しているのかを明らかにしたり、インタビューでは、頻繁に用いられる語を特定し、話者が潜在的に意識している事柄について分析を行ったりすることが可能である。近年では、内容分析の分野以外にも、例えば、語学教育の分野で、使用頻度の高い単語や、指定した語の前後パターンを計量的に明らかにするため等、本ソフトを用いた研究が徐々に盛んになりつつある。

本研究でも、自然談話における内容語ではなく、文法的要素である機能語

に着目して分析を行っているため、内容語だけではなく、機能語の分析を可能にする KH-coder を用いて分析を行っている。

しかしながら、KH-Coder で熊本方言を含むテキストファイルを扱うには限界がある。KH-coder には茶釜（日本語自然言語処理システム；奈良先端科学技術大学院松本研究室作製 <http://chasen-legacy.sourceforge.jp/>）が装備されており、標準語のテキストは瞬時に形態素解析を行うことができる。一方、熊本方言を含むテキストは、熊本方言の辞書が搭載されていないため、正確に形態素解析を行うことは不可能である。

そこで、自然談話資料を分析する際に、対象とするべき方言要素をあらかじめ指定したコーディングルール・ファイルを作成した。

5. コーディングルールについて

資料 1 は、和田（2015）が抽出した方言要素とその分類を基に、より詳細な分析を可能にするため、筆者が細分化したものである（注 6）。

資料 1 に、* を付して「文末詞か」と書かれているのが、コードである。そのコードを含んだ自然談話テキスト内の表現の例を右に列挙している。使用例のカタカナ表記は熊本方言で、さらに下線が付してあるものは、コードに該当する熊本方言である。

資料 1 コーディングルールを付した方言要素

（カタカナ表記は熊本方言、下線は当該の方言要素）

- *コード名；使用例
- *文末詞か；行かントカ、わからンドカ、だったロカ
- *文末詞たい；いいタイ、私タイ、変タイ
- *文末詞だろ；昼からダロ、いかんダロ、前ダロ
- *文末詞だん；無理ダン、100 円ずつダン、西回りダン
- *文末詞つたい；おったツタイ、送ったツタイ、多いツタイ
- *文末詞とたい；決めとつタイ、しゃべつタイ、言わすつタイ
- *文末詞と；来ント、ヨカつじゃないト、言わナント
- *文末詞ど；合うド、もういいド、回られんド
- *文末詞ね；大体なんネ、セールだけんネ、楽ダンネ
- *文末詞もん；推してアッモン、狭かモン、食いヨラシタモン

- * 文末詞や；離れントヤ
- * 格助詞カラ；うちらカラ言われて、先生カラいただいて
- * 格助詞サン；[施設名] さんの方サン、前サンやらナン、
- * 格助詞ニヤ；ヨー飲むモンニヤ
- * 格助詞ノ；関係ノあつトヨ、日ノ暮れる、イチゴノのった
- * 格助詞バ；花びらバ、子供バ、バイパスバ
- * 格助詞ン；学校ン、雨ン時、人ンチャリ
- * 否定形；見えン、聞こえン、教えン、できン、
- * カ語尾；ヨカ、大きカ
- * 終止形+です；オラスです、降るです
- * アスペクト表現；見トル、似トッて、見ヨル、来ヨッて
- * 接続；予定だケン、残したっチャ、さむナカバッッン
- * 義務；見らナン、通らナン、待っとかナン
- * 例示；おもちゃんゴタツト、乗るゴタ車、人ンゴタっ
- * 可能；行かレン、食いキラン、
- * 助言；丸しといタガイイ、書いといタガイイ、悩まんチャエエ
- * 否定表現；出てこなくないですか、書かないですかね
- * 敬語；オラシタ、塗っタクットラス、紹介サシタ
- * 語彙；回ったコツ、もうチツット、そがんシコ
- * 動詞；オラシた、まだユウても、コウタケン
- * 指示詞；ドガンしとる、アガンとの、ソガンだらう
- * 間投詞；ソラそがんだらう、なんやソラ、アラ、若い人がおる
- * 程度副詞；エライ怖かった、ヨウ似とって
- * 音変化；さがしたじャニャー、何がちギャー、三角線ニャーケン

このコーディングルール・ファイルを KH-Coder で使用することにより、本研究で作成した自然談話テキストにおいて、方言要素の使用実態をより詳細に分析することが可能になった。

6. 家族 - 友人間の発話に現れるコードスイッチング

本研究で分析対象としたのは、話者 A の発話のみである。書き起こし資料の文字数は 76,292 字となった。

家族、友人との会話でどの程度、熊本方言を使用しているのかを調べるため、談話の場面と方言要素の使用について、クロス集計を行った。表1は、その集計結果である。場面間における方言要素出現率に差があるのかについては、カイ2乗検定を使って判定を行った。コーディングルールを作成した36の方言要素のうち、場面による使用頻度に有意差がある方言要素が25、網掛けで示した有意差がない方言要素が11という結果になった。

表1 談話場面と方言要素とのクロス集計 ** $p < .01$, * $p < .05$

	家族	友人	先輩	目上の人	合計	カイ2乗値
*文末詞か	6	0	0	0	6	7.068
*文末詞たい	36	6	0	0	42	27.203**
*文末詞だろ	21	0	0	0	21	24.832**
*文末詞だん	13	0	0	0	13	15.341**
*文末詞つたい	11	7	0	0	18	2.239
*文末詞とたい	10	0	0	0	10	11.792**
*文末詞と	52	6	0	0	58	45.397**
*文末詞ど	7	1	0	0	8	5.598
*文末詞ね	40	12	1	0	53	18.903**
*文末詞もん	27	7	0	0	34	15.760**
*文末詞や	1	0	0	0	1	1.177
*格助詞カラ	0	5	0	0	5	5.291
*格助詞サン	4	0	0	0	4	4.71
*格助詞ニヤ	1	0	0	0	1	1.177
*格助詞ノ	7	7	3	0	17	5.443
*格助詞バ	12	0	0	0	12	14.158**
*格助詞ン	36	9	0	0	45	21.623**
*カ語尾	26	1	0	0	27	27.751**
*否定形	175	27	3	0	205	135.245**
*終止形+です	14	18	2	0	34	0.421
*アスペクト表現トル	58	7	0	0	65	49.997**
*アスペクト表現ヨル	99	5	0	0	104	104.313**
*接続	165	24	1	0	190	134.603**
*義務	15	1	0	0	16	14.792**
*例示	11	0	0	0	11	12.975**
可能	8	0	0	0	8	9.429

*助言	1	2	1	0	4	3.43
*否定表現	1	1	7	0	9	96.772**
*敬語	93	4	0	0	97	99.819**
語彙	14	3	0	0	17	9.219
*動詞	52	3	0	0	55	53.063**
*指示詞	44	0	0	0	44	52.334**
*間投詞	6	1	0	0	7	4.494
*程度副詞	13	1	0	0	14	12.461**
*音変化	13	0	0	0	13	15.341**
ケース数	1827	1933	206	10	3976	

表2の結果を図で表すと、図1のようになる。方言要素である「否定形」コードや「接続」コードは、出現率が高く、円が大きくなって

いる。また、家族の項目の方言要素のコードの大半は、他の先輩や友人の項目より円の色が濃くなっている。これは、標準化残差 (Pearson 残差) に基づくもので、例えば、「接続」コードは他の先輩や友人より家族との会話で多く出現しているので、残差が大きく、色が濃くなっている。

これらの結果から、話者Aは、家族との会話で多くの熊本方言を使用するが、先輩や友人との会話では標準語に切り換えてしまい、熊本方言を使用しない傾向にあるという、表1の情報が裏付けられたということができる。

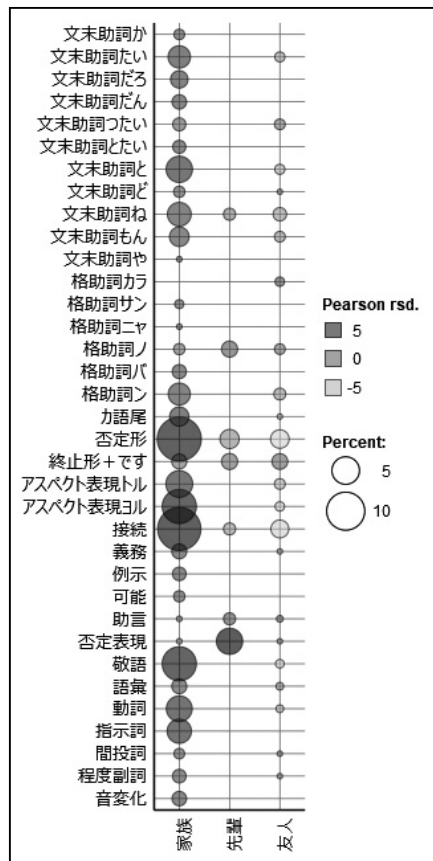


図1 場面ごとに見た方言要素コードの出現率のバブルプロット

7. コードスイッチングの生起条件についての考察

話者 A は、家族と友人それぞれの会話において、自分のスピーチスタイルを切り換える傾向にあることが明らかとなったが、表 2 や図 1 で分かるように、友人との会話では、ほとんど標準語を使用しながらも、一部の方言要素についてはそのまま使用している。つまり、友人との会話では、標準語を基本としたスピーチスタイルであるが、ある発話においては、熊本方言を用いたコードスイッチングが出現している可能性がある。

本章では、友人との会話で比較的高い出現率を示している「接続」コードを対象に、コードスイッチングの生起条件について考察する。

話者 A が友人との会話で使用した「接続」の標準語は「から」で、熊本方言は「ケン」である。表 3 に示したように、それぞれの使用件数は、「から」が 175 件、「ケン」が 18 件で、正確二項検定を用いて検定した結果、有意差が認められた ($p < .01$)。(注 7)

表 2 友人との会話における「接続」表現の使用件数

	標準語「から」	方言「ケン」	正確二項検定
使用件数	175 (90.6%)	18 (9.3%)	**

** $p < .01$

話者 A が友人との会話で使用した「接続」表現の方言「ケン」を含んだ発話には、以下のようなものがある。

- (1) まあもともとそんな使いこなせるようになるとも思っていないケン、あんま増やす気もないんだけど。(談話 1)

この談話では、造語や若者言葉の使用が話題になっていて、造語などを「使いこなせるようになるとも思っていない」し、「増やす気もない」というのが話者 A の発話の意図である。これを仮に家族との会話での発話だと想定すると、以下のようになると考えられる。

- (1) まあもともとソガン使いこなせるゴツなると思っトランケン、あんま増やす気もナカバッテン。

(1) 〃では、方言を示すカタカナ表記が増え、その他の方言要素も多く使用されている。一方で、(1)では主に標準語が使われているが、「接続」コードの表現を用いるところだけ、標準語である「から」ではなく方言である「ケン」を使用している。本稿では、このように標準語中心の発話の中で、方言要素が用いられるような現象を「コードスイッチング」と呼んでいる。このような友人との標準語を中心とした会話において、突如方言のコードを用いる現象は、第2章において「会話の当事者たちは自分がコードスイッチングしているという意識が全くない場合が多い」と指摘したように、本稿の被験者である話者Aも、意識して用いているわけではないと考えられる。また、「接続」コードが必ずケンになるというわけではなく、その割合はおよそ10%程度である。しかしながら、方言の「接続」コード「ケン」は、脈絡もなく表れるのではなく、何かの条件によって、出現を左右されていると考えることができる。その生起条件には、自分語り（心情の吐露）、敬語使用、聞き手への働きかけという3つがあるのではないかと考えている。

まず、自分語り（心情の吐露）であるが、先述の(1)や以下の文がこれにあたる。

(2) 一番まん真ん中で、きつ、時間的にきついなと思ったケン、それだったら、水曜の午前中か火曜の夜がいいですっていうのを送ったツタイ。(談話14)

(3) あの辺もいまいち分かってないケン、一回[苗字1]と練習したいんだけど。(談話14)

(4) [外国人名]が来るって分かってしまったケン、[外国人名]に習えばいいじゃんっていう、最近。(談話20)

(2)の「きついな」と思った」や(3)の「分かってない」、(4)の「分かってしまった」、(1)の「思ってない」の主語は、話者A本人である。自分について、心情や自分自身の現状について語っている発話で、「接続」の「ケン」が使用されている。

また、文中に敬語が現れた場合も、「接続」の表現として方言の「ケン」

が使用されている。

(5) 文学部の他のクラスは、あの、担任しトラス国語の先生とかオラシタケン、その先生担当じゃなかったから、たぶん行ってないんだよね（談話 17）

敬意を表すべき第三者について述べる際、標準語ではなく、方言を選択することがある。この場合、「接続」の表現の使用ではなく、それ以前のタイミングで、方言へとコードスイッチングしているため、「接続」の方言「ケン」を自然に選択すると考えられる。

他に、聞き手への働きかけの発話において、方言の「ケン」が使用されている例もある。

(6) 聞きに行く勇氣はないケン、聞いて、聞いて来て。（談話 17）

(6) は聞き手に「聞いてくる」ことを依頼している発話である。このように、依頼や要求など相手に働きかける表現を使用する際に、「接続」の方言「ケン」を使用している。

このように、話者 A は、発話の大半を占める一般的事柄についての発話や、他者についての陳述など、事実を伝えることを目的としている発話では、標準語の「から」を使用している。一方で、心情の吐露を含んだ自分語りや文中の敬語使用、聞き手への働きかけなどを含んだ発話では、「接続」表現を用いる際、方言「ケン」へのコードスイッチングが現れる傾向にある。

8. 結論

本稿では、熊本市在住の 20 代女性話者 A の自然談話における、家族や友人など場面ごとの方言使用の実態について分析を行った、また、家族との会話に比べて、極端に方言要素の使用が減少し標準語の使用が増えた友人との会話において、標準語から方言へのコードスイッチングの生起条件にはどのようなものが考えられるかについて検討を行った。

その結果、今回の調査に協力した話者 A は、家族との会話と友人との会話における方言使用に明らかな差があり、場面による積極的な切り替えを

行っていることが明らかになった。話者 A は、家族と積極的に熊本方言を使用しており、自然談話データの採集の際の事前アンケートでも、明確に認識している。実際に、方言要素使用のクロス集計では、対家族と対友人ではデータの上でも使用する方言の種類や量などが全く異なり、データの上でも、切り換えの認識が確立していると考えられることができる。また、主に友人との標準語使用を中心とした会話において、本来標準語を使用するはずのところ、熊本方言へのコードスイッチングが出現することを指摘した。熊本方言へのコードスイッチングが現れる生起条件については、心情の吐露など自分語りの発話であること、依頼や要求などの他者への働きかけの発話であること、同じ文脈の中に熊本方言で敬語が用いられている発話であるという3つの生起条件を示唆するに至った。

しかしながら、これら3つの生起条件以外にも、例えば、直前の音環境の影響等も排除できないと考えている。直前の発話環境、つまり言いやすさ、によって、「から」と「ケン」のいずれかを選択するという可能性も排除できない。また、本稿では、1名の被験者を選択し、家族や友人といった限られた関係の中での自然談話データを用いて分析を行ったが、今後は他の話者で同様の調査を行い、特に、標準語での発話において方言のコードスイッチングが出現するかどうかについて、本稿の結果との比較検討することも必要である。

本稿では、標準語の「から」、方言の「ケン」という特定の表現を基準に、同一話者の同一談話内での、標準語から方言へのコードスイッチングについて、その生起条件を示唆することができた。今後は、複数の地域共通話者の自然談話資料を用いて、3つの生起条件についての検証を行い、それ以外の生起条件の可能性も調査分析し、標準語と方言が混じりあっている地域共通語の実態を明らかにしていきたい。

注)

注1) 田中ゆかり他(2012)「話者分類に基づく地域類型化の試み：全国方言意識調査データを用いた潜在クラス分析による検討」国立国語研究所論集3号 .p.117-142

注2) 沖裕子(1999)『気がつきにくい方言(地域方言と社会方言)』日本語学18号13巻, 156-165, 明治書院

注3) 東照二(2009)『社会言語学入門(改訂版)』研究社

注4) Janet HOLMES (1992), “An Introduction to Sociolinguistics” ,Addison-Wesley Pub

- 注 5) 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版
- 注 6) 和田礼子 (2015) 熊本方言要素の抽出と分類—談話資料にどのようなタグを付したか—科学研究費補助金 (基盤研究 (B) 一般) 課題番号 22320096-1、2010-2013 年度「地域社会に順応するための「気付かれない方言」教材の作成とその方法論の構築」 (研究代表者: 馬場良二) 成果報告書 <http://www.pu-kumamoto.ac.jp/~iimulab/dialect/nansan/pdf2/hoogen%20yooso%20chuusyutsu.pdf>
- 注 7) js-STAR version 8.9.8.2j (β 版) <http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/freq/1x2.htm>